

院内スキンケアチームの活動報告

坂本理和子¹⁾、嶋宮美野子¹⁾、喜多 悦子¹⁾、北山由紀子¹⁾
安念 和哉²⁾、松岡 伸一²⁾、三橋 公美³⁾、秦 温信²⁾

札幌社会保険総合病院 スキンケアチーム 看護部¹⁾、外科²⁾、泌尿器科³⁾

スキンケアチームは、1997年5月に発足し院内の創傷・ストーマケア・失禁ケアにおいて、患者の持つ問題に対する直接の援助、看護スタッフへの指導、コンサルテーション活動を行っている。発足から21ヶ月で85件の依頼があった。創傷ケア27件、ストーマケア58件、失禁ケア0件である。スキンケアチーム介入後、創傷ケアは96.3%が治癒または軽快、ストーマケアは81%がトラブルの改善・予防、セルフケアの自立がされていた。事例の分析から、チームのアドバイスにより医師、看護婦がそれぞれの視点で介入し、互いの役割を尊重しながら取り組んだことで良い結果が得られたものと思われる。しかし、依頼が少ない分野もありより多く活用される工夫が今後の課題である。

キーワード：スキンケアチーム、ストーマ、創傷、褥瘡

はじめに

スキンケアチームは、1997年5月から院内の創傷・ストーマケア・失禁ケアに於いて患者の持つ問題に対する直接の援助、看護スタッフへの指導、コンサルテーションなどの活動を行い、院内におけるケアの質の向上を目指している。この活動を評価し、効果と課題を明らかにしたい。

用語の定義

スキンケアチーム：

院内の、医師、看護婦、

創傷・オストミー・失禁看護認定看護師（以下WOCナース）で構成されたグループ。

院内の創傷・ストーマケア・失禁ケアにおいて患者の持つ問題に対する直接の援助、看護スタッフへの指導、コンサルテーション活動、及びこれらを行うための体制を調整する等の働きをしている。

方 法

スキンケアチームが介入した85件のケア件数、介入による変化の集計結果と症例の検討からチームの活動の評価を行う。

期間

1997年5月～1999年2月までの21ヶ月間

対象

期間内に相談・依頼のあった85件

依頼

各科の婦長を通しチームメンバーであるWOCナースへ連絡がある。

結果

ケアの総のべ回数は672回、創傷262回1人平均9.7回、ストーマケア410回1人平均7.1回である。

1回のケア時間は30分から1時間であった。依頼者・セクションはグラフに示した通りである（図1）

依頼のあった85件は、創傷27件、ストーマケア58件で失禁は0件であった（図2）。

創傷ケアの依頼は直接ケアとスタッフへのケア指導で、創の種類として最も多かったのは仙骨部の褥瘡であった（図3）。

ストーマケアの対象で多かったのは本人で（図4）依頼内容で最も多かったのはスキンケアとセルフケア教育（図5）であった。ストーマの種類として多かったのはウロストミーであった（図6）。

チーム介入後、創傷ケアは63%が治癒、33%が軽快しており（図7）、ストーマケアは32%がスキントラブルの改善、35%がスキントラブル予防、14%のオストメイトがセルフケアの自立がされていた

図1 1997年～1998年度依頼者別件数 n=85

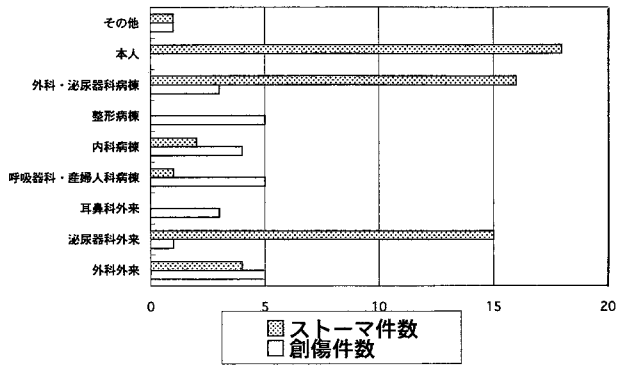


図2 依頼の内訳 n=85

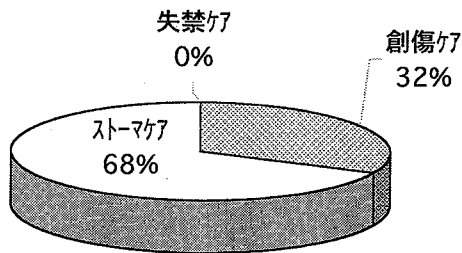


図3 ケアを行った創傷の種類 n=27

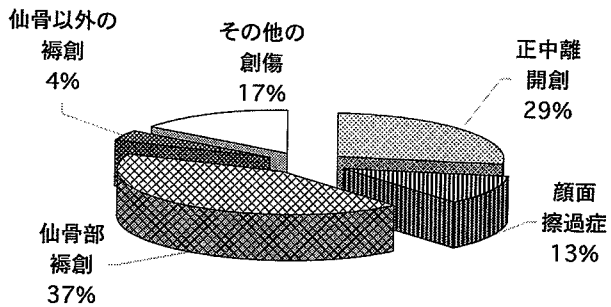
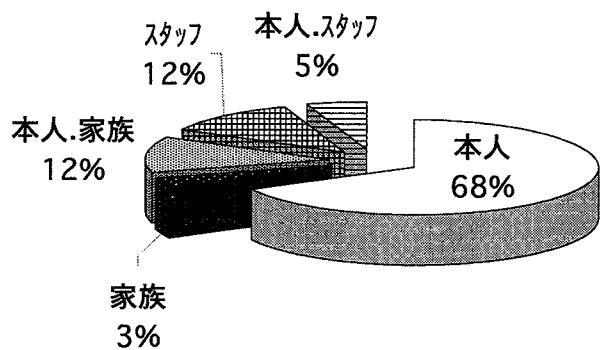


図4 ストーマケア. ケアの対象 n=58



(図8)。

図5 ストーマケア依頼内容 n=58

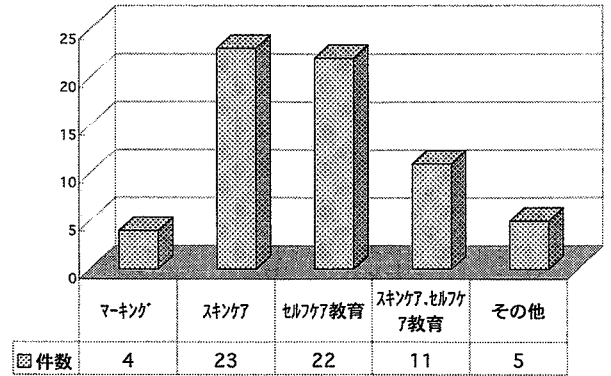


図6 ケアをしたストーマの種類 n=58

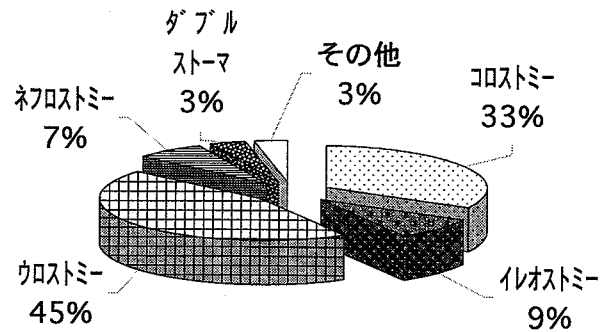


図7 創傷ケア終了時の状態 n=27

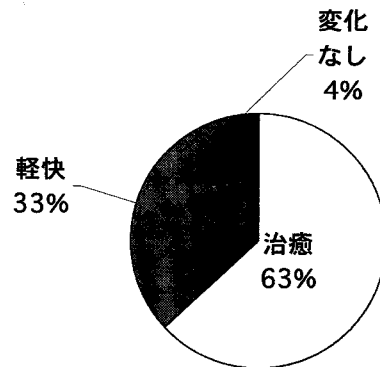


図8 ストーマケア後の変化 n=58

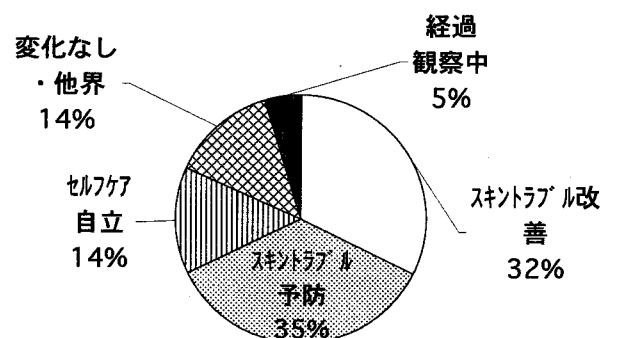


図9



図12

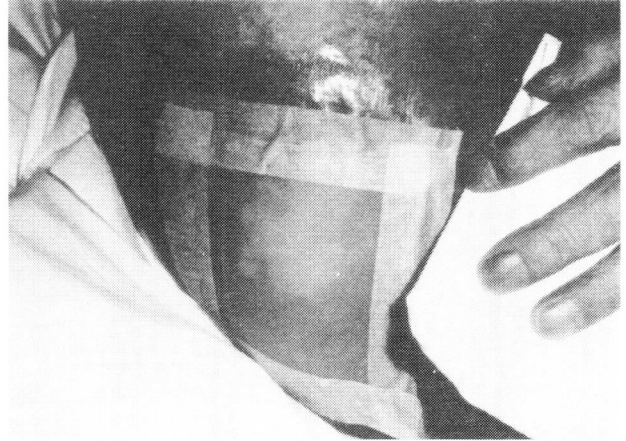


図10



図13

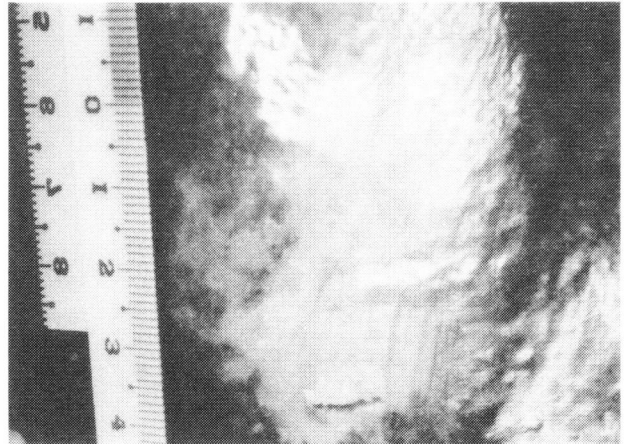


図11

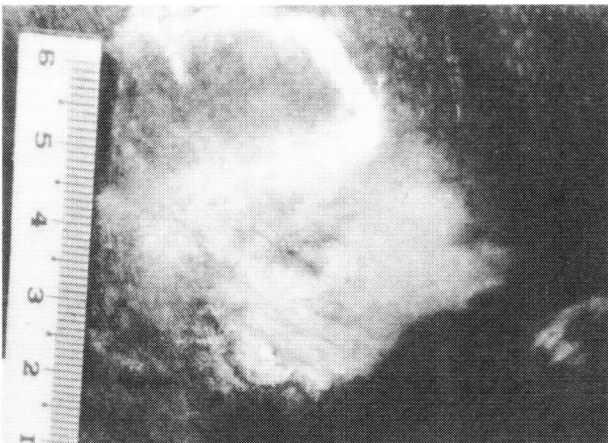
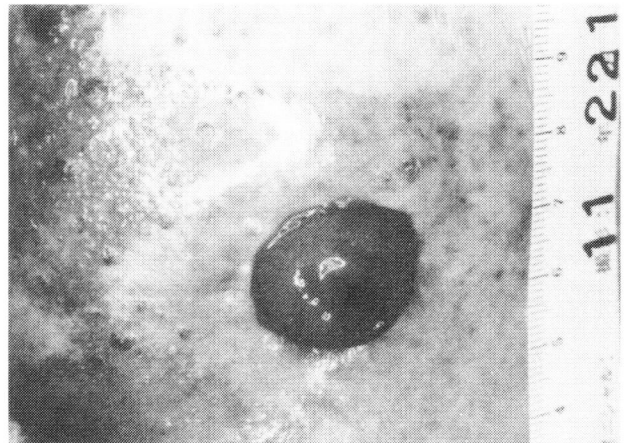


図14



症例1

A氏 68歳 男性

病名 左大腿骨顆骨上骨折、右座骨部褥瘡（1～2度）

既往歴

S40 交通事故にて脊椎損傷(T12)

S43 転倒にて右大腿骨骨折

H7 右膝部褥瘡にて手術施行

H8 左座骨部褥瘡にて手術施行

右大腿骨顆骨上骨折のため入院時より右座骨部へ2度の褥瘡があり、活動性の増加と共にずれ・摩擦がおこる機会が増え治癒が遅延していたため依頼が

図15

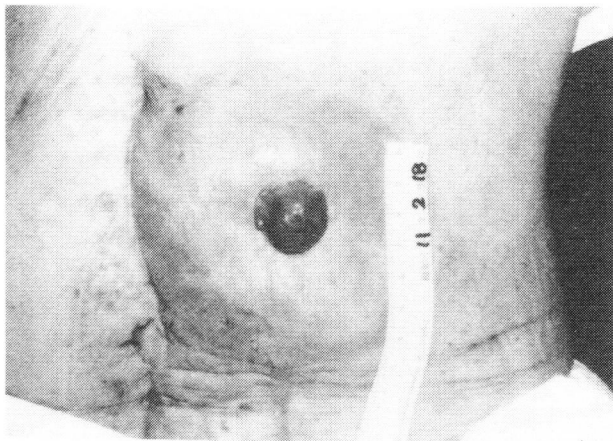


図17

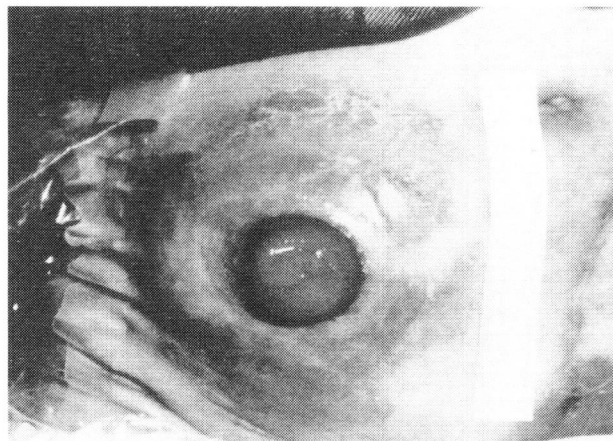


図16

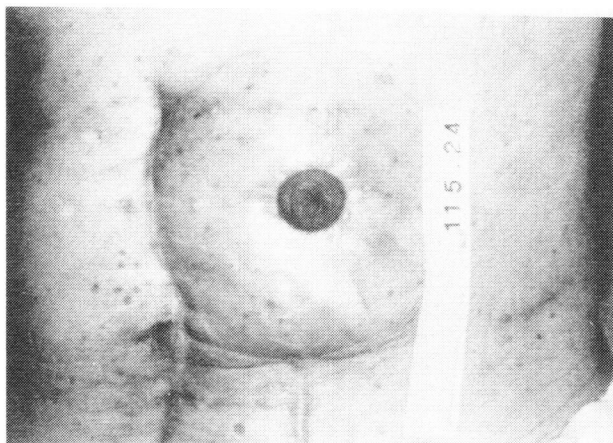


図18



あった(図9)(図10)。ドレッシングはデュオアクティブETを使用した。創は白く侵軟しゲルが固着している状態であった(図11)。

親水性ポリマーが多く含まれゲル化しない創傷被覆材としてコムフィールへ変更(図12)。

1週間後創は一部を残し上皮化、滑らかに再生した(図13)。

症例2

T氏 71歳 男性

病名 直腸ガン・ストーマ周囲MRSA皮膚炎

既往歴:

H9.12.8~H10.1.30

直腸癌にて低位前方切除術施行

H10.9.3~H10.12.3

吻合部再発にてMiles術施行

経過: 99.1.21ストーマ周囲に発赤とびらんが生じた(図14)。びらん部は装具を貼らない臍にも及び、ストーマ部から2~3cm離れていることから排泄物

や皮膚保護材が原因ではないと判断し1/18皮膚科へ相談した。

びらん部よりMRSA(++)が検出された。軟膏を塗布すると装具を貼ることが難しくなるためポピドンヨードを塗布し乾燥後洗浄するという方法で20日後びらは消失(図15)、4ヶ月後治癒した(図16)。

症例3

C氏 62歳 男性

病名 膀胱癌 傍ストーマヘルニア

尋常性乾癬(98'12月診断)

既往歴

H8.10.23~H9.1.28

膀胱全摘術・回腸導管増設術施行

経過:

98.10.30ストーマ周囲に発赤と表皮脱落が見られた(図17)。

装具の変更にも変化がなく、正中創の一部にも同

様の症状がみられたため、皮膚科へ相談した。頭皮内にも同様の症状がみられ、尋常性乾癬と診断され、面板貼用部と頭皮に副腎皮質ホルモンローション、正中創その他へ副腎皮質軟膏が処方され1ヶ月後改善した(図18)。

考 察

依頼の総件数85件のうち7割はストーマケアである。依頼内容は本人を対象としたものが7割でスタッフへの指導は1割であった。

ケア内容もセルフケア教育が3割、スキンケア・セルフケア教育が2割と半数を占めておりスキントラブルの問題について難渋はしているもののストーマケアにおいて最も難しいのは本人への教育であるものと思われた。

依頼の3割が創傷ケアである。創傷ケアは直接のケア・スタッフへのケアの指導が依頼内容である依頼は褥瘡4割、正中離開創3割顔面擦過傷1割その他が2割をいう結果であった。この数値から当院の創傷におけるケアの問題解決に十分な活動がチームとして行えているかは、当院における創傷ケアに関する問題の発生率等の調査など行えていないため明確にする事ができなかった。当院における褥瘡やスキントラブルの発生に関する調査は今後の課題である。

チームの介入により、ストーマケアは8割がセルフケアの自立スキントラブルの改善・予防が達成し、

創傷ケアに於いても7割弱が治癒し、3割が軽快している。この結果について症例を通し分析すると、症例1は観察や評価、直接のケアは主に病棟ナースが行い、被覆材の選択に関してはWOCナースが情報を提供し医師が処方している。

症例2・症例3は定期的な観察・評価はストーマ外来において外来看護婦・WOCナースが行い、医師が皮膚科への依頼を行った。

皮膚科医師は看護婦の情報により処方に関する工夫を行っている。以上のようにチームが介入することで患者の持つ問題の解決として各科の医師や看護婦がそれぞれの役割を果たしたことが良い結果につながったものと思われる。

しかしチームへの依頼で本来多いはずのコロストミーのケアは少なく褥瘡の予防、失禁の相談がなかった。チームとしてどの様なときに依頼するべきかなどの説明やプロトコルなど示していないこと、依頼のルートなど広報の不足が原因として考えられる。

チームの活動に関する広報やより活用しやすい依頼ルートの確立が今後の課題である。

結 論

スキンケアチームの活動により創傷・オストミーケアの質が向上した。

褥瘡の予防・失禁・コロストミーのケアの依頼が少なく、活動内容の普及に努めるなど利用しやすい工夫を行うことが今後の課題である。

Skin Care Team in our Hospital.

Riwako SAKAMOTO, Miyako SIMAMIYA, Etuko KITA, Yukiko KITAYAMA
Skin Care Team, Sapporo Social Insurance General Hospital

Kazuya ANNEN, Sinichi MATSUOKA, Yosinobu HATA
Department of Surgery, Sapporo Social Insurance General Hospital

Kimiyosi MITHUHASI
Department of Urology, Sapporo Social Insurance General Hospital

A skin care team was established in May 1997 to directly help the patient's solve problems concerning wounds, ostomy and incontinence in the hospital, and to further provide guidance and consultation services to the nursing staff. During the 21 months of the teams establishment, 85 cases were brought to the team; they consisted of 27, 58 and 0 cases of wound care, stoma care and incontinence care, respectively. After the skin care team were consulted, 96.3% of the cases concerning wounds were healed or the condition improved, and in 81% of the cases concerning stoma care, the problems were solved or prevented, enabling the patient to care for themselves. Analysis of the cases revealed a good outcome owing to the appropriate advice from the team, which enabled the doctors and nurses to intervene with their own professional viewpoints, while accepting the opinions of each other. Since there were some areas in which the team were not consulted, further effort is needed to extend the activities of the team.
